慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	前原光雄先生の想い出
Sub Title	
Author	池井, 優(Ikei, Masaru)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1992
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.65, No.6 (1992. 6) ,p.143- 144
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	前原光雄先生追悼記事
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19920628-0143

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

前原光雄先生の想い出

前原光雄先生が八九歳の天寿を全うされた。

私が義塾法学部政治学科に入学をしたのが昭和三〇年。当時前原先生は、法学部長としてあの大柄な体で堂々としておられた姿を想い出す。当時政治学科の学生も国際法は必修であった。

「前原先生の国際法はからいぞ。」

こうしたうわさが次々に流れてきた。教科書の注にあるラテン語が試験問題に出たとか、前原先生の国際法がAなら無条件でとる会社があるとか、真偽いり乱れての情報が学生の間に流れていた。幸か不幸か、私が三年に進級し国際法の授業を履習した時から、政治学科の国際法は中村洸助教授に代った。その中村先生が今年停年で義塾を去られたのだから、今さら時の流れを感じる。したがって前原先生のからいから国際法の洗礼は受けずにすんだが、大学院を経て大学に残ることになると、先輩教授として接することになった。

ある時前原先生から直筆のお手紙を頂戴した。「何か悪いことでもしたのか」とおそるおそる開封してみると、先生の何かのお祝いの会に出席したお礼状であった。こちらは助手から専任講師になったばかり。三〇歳以上も年令の違う若いスタッフにお体に似合わずほっそりとした女性的な字で会の出席に対するお礼が述べられていた。印刷した礼状ならまだわかる。おそらく私を含め出席者全員に一枚一枚心をこめて書かれたのであろう。この気配りに感激した覚えがある。

前原先生は岡山県のご出身。岡山なまりであろうか。「国際法」が「コクシャイホウ」になり「ゼミ」が「ジェミ」となり、われわれはよく「シェンジコクシャイホウ」（＝戦時国際法）などと発音しては仲間うちで大笑いした。だが前原先生の前でそれをやっても許される雰囲気があったし、またそれを先生はニコニコして眺めておられた。

大学院で同期だった栗林忠男君（現法学部教授）が結婚する際司会を務めた私を、媒酌人の前原先生は、披露宴が終るとわざわざ司会者の席まで寄って来られ「君、なかなかよかったですよ。」と、おほめをいただいた。媒酌人がわざわざ司会者の労をねぎらうというのも珍しいことであった。ここにも前原先生のお人柄があらわれていた。

昭和三八年に還暦を迎えられた前原先生に対し、国際法学会の重鎮たち、横田喜三郎最高裁判所長官（元東京大学教授）、高野雄一東大教授、田畑茂二郎京大教授、一又正雄早大教授、伊藤不二男九大教授をはじめ一五人の寄稿のもとに『国際法学の諸問題』と題する立派な記念論文集が刊行された。

これも、国際法学者として著書・訳書・論文・書評をコツコツと発表され、国際法学会において慶應義塾を代表して大きな地位を占めておられたことを示すものであった。

また前原先生は体育会端艇部部長として、日本代表としてオリンピックのボートに出場する選手達を激励されたり、図書館長として本、資料の整備にあたられたり、常任理事として義塾の運営にタッチされるなど、学問以外で義塾に尽された功績も大きい。

改めて先生のご冥福をお祈りする次第である。

法学部教授　池　井　優

恩師・前原光雄先生の逝去を悼む

一九九一年七月二八日、恩師前原光雄先生が逝去された。享年八九歳であった。先生は、学内にあっては故板倉卓造教授の後継者として国際法学を長年担当されるとともに、学生部長、法学部長、図書館長、常任理事の要職を相次いで歴任され、研究・教育のみならず義塾の経営・運営にも多大の功績を残された方であった。また、学外においては、戦後再建期における日本国際法学会の理事、研究部・雑誌部委員、会計主任を歴任され、昭和四一年には国際法学会の理事長を務めるなど、学界の発展のために大いに貢献された。学内・学外の多くの人々に慕われた先生の誠実なお人柄がいま懐かしく偲ばれる。

先生のご研究は戦争法、国際法思想、海洋法、国際裁判など国際法の多方面に及んでいる。なかには、今でも議論されている領空の上限の問題を扱った論稿もある。先生のご関心が国際法の基礎理論のみならず実証的研究にもあったことは、昭和二七年に設けられた運輸省の捕獲審検再審査委員会において海上捕獲の専門家として約一〇年間務められ、後にそれを「捕獲法の研究」として大著に纏められたのを見ても判る。